

小学校英語教育の充実

尾上 利美 (和歌山大学教育学部)・中岡 正年 (和歌山大学教育学部附属小学校)

瀧本 知香 (和歌山市立宮小学校)・林 真希 (和歌山市立和佐小学校)

中村 正雄 (和歌山市立貴志南小学校)・宮崎 文花 (和歌山市立四箇郷小学校)

三龍 直人 (高野町立高野山小学校)

1. 研究課題について

連携校の英語教育充実のために、教科書の活用方法、教材・教具の開発、振り返りや指導形態のあり方、学年間を見通した学習のあり方や授業づくり、ICT活用、他教科と関連づけた指導等などについて、多角的に検討することが本研究課題の目的であった。

2. 取り組みについて

依然として新型コロナウイルス感染症拡大防止への様々な対応が続いており、相互に学校を訪れ授業を参観する機会を持つことは難しい状況であった。共同研究者間の交流は、主にメール等を活用して行われた。このような中ではあったが、11月5日(土)に和歌山大学教育学部附属小学校の2022年度教育研究発表会が開催され、午後の部は対面によって実施された。子どもたちの学習の様子を生で参観できる中岡先生の研究授業が実現し、研究授業の後は、協議会も開催された。共同研究者の先生方をはじめとする多くの先生方にもご参加いただき、直接意見を交換することができた。

3. 授業実践から

3.1 本実践の主張点

自分達に関係が深く、外国語で伝えることに必要性がある相手と交流することで、自分の気持ちや考えを表現することへの意識が高まり、語句や表現の理解が深まり、外国語を積極的に活用しようとする子どもの姿がみられると仮説を立てた。

子どもたちにとって、外国語である英語を用いて自分の気持ちや考えを伝えることは、日常的なことではないと思われる。一方、子どもたちは高学年になり、自分達も将来、他者と外国語でコミュニケーションをとるであろうことやその必要性を感じている。今回、子どもたちには和歌山にルーツをもつ海外の人に自分達や地域のことを紹介する目的をもたせることで、英語を活用する必然性を感じさせ、既習内容を活かしたり、相手に反応する言葉を使おうとしたりするといった主体的に学ぶ姿を期待した。

(1) 主体の姿を引き出すためのしかけ

子どもたちが行った活動をもとに実践を行うことが主体的に活動することにつながると考えた。本実践は、子どもたちが5年生のときに行ったウクライナへの募金活動に端を発する。その活動を通じて、6年生時にはウクライナ大使館の方やシアトル紀州クラブの方との

交流が広がっている。自分達から始まった活動であること、外国語（英語）を使う必然性がある相手との交流は主体的に外国語を活用しようとする気持ちを引き出すことになると考えた。

（２）協働の姿を引き出すためのしかけ

ペア学習やグループ活動を取り入れポインティングゲームやインタビュー・タイムを行うことで、表現や語句の確認を楽しみながら確認できるようにした。その際には「Why?」や「Me too!」などを使い反応することで話題を広げさせた。また、日々の取組として、継続して教師や子どもたちで「small talk」を行い、教師や友達とのやりとりから既習の内容から自分たちのことを伝えるために活かすことができる表現や語句の模索や活用について考えさせ交流へ向けて「相手によく伝わるように」を思考させ続けた。

（３）活用の姿を引き出すためのしかけ

テキストの例文を「Basic sentence pattern」とし、掲示したり、子どもたちと確認したりしながら、伝えたい内容を作成させた。単元を通して、既習内容から自身の思いを伝えることができる経験を積み重ねた。

（４）省察の姿を引き出すためのしかけ

以上の３つの姿から、主体的に活動を行いながら友だちとの交流をとおして、既習内容を活用することで自分の思いを伝えることができることに気付かせた。一方で子どもたちは、自身の思いと表現できることの差に考えが揺らぐこともあったと思われる。しかし、そのことが、課題を解決するために自身との対話や他者と建設的な話し合いを行うことになり、伝える相手を意識した自分の活動や成果を俯瞰的にみることになると考えた。

これらの「しかけ」を講じることによって、自身の伝えたいことと既習内容が結びつき、今までの学びの中から何が必要か、何ができるかの自己調整が行われ「相手によく伝わるように」最適な表現を探究し続ける姿がみられた。

3. 2 「しかけ」の効果とその成果

本実践では「主体」「協働」「活用」「省察」を意識して４つのしかけを講じた。それぞれのしかけは、実践の中で次のように効果を発揮した。

「主体」の姿を引き出すために、子どもたちの活動に端を発した実践を行い、また年間を通して活動を行うことによって、コミュニケーションをとる相手、目的、状況が明確にすることができた。

このことによって、子ども達の中で「外国語を使う必然性」が生まれ、既習の表現や単語を使って、思いを伝えようとする姿がよくみられた。単元を通して、相手意識をもって「話す」の「発表する」の目標を達成するために主体的に取り組んでいる様子がみられたと考えている（図１）。



図１ 県人会の方に向けて交流動画を撮る様子

「活用」においても既習の内容と自分の伝えたい思いを結びつけ、単語を入れ替えたり、違うユニットの表現も活用したりし、既習の内容を活かして、自分の思い出を伝える姿がみられた。ここで講じた「しかけ」は既習の内容の一覧できるように掲示したこと、「FLT」による支援であった。本実践の子ども達の姿から、今までの子どもの学習を一覧できるようにしたことや子どもたちの様子をよく知っている FLT の支援が効果的に発揮したと考えている。

「協働」においては、単元の第7時において、動画を発表者と評価者に分けて互いに思い出を伝え合わせる活動を行った。このことにより、発表者が自分の思いを発表する時間が確保され、発表することの大切なポイントを押さえながら活動を行うことができていた。

一方、評価者には、評価シートを渡していたが、評価シートを書くのに、時間がかかってしまったという意見があったので、改善していきたいと考えている（図2）。



図2 互いに表現を確認する様子

「省察」においては、児童観察と子ども達が毎時間行っている「ふり返り」からその成果を確認することができる。子どもたちは、毎時間の授業や単元をとおして、既習の内容や相手に伝えることを意識しながら、より良く「自分の思い出」を伝えようとしている場面をみることができている。また動画を撮る場面でも、自分の発表している様子や友達の発表している様子を比べる中で、さらにより良いものにしていきたいと探究している姿がみられた（図3）。

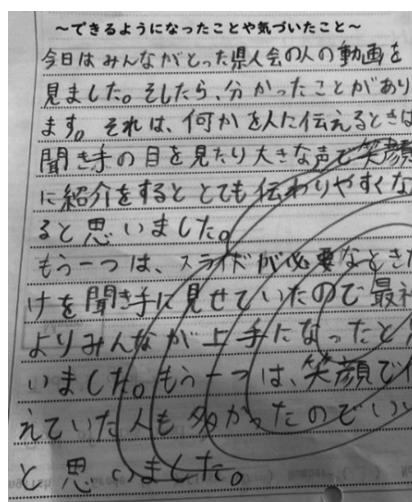


図3 子どものふり返り

4. 課題と今後の展望

今回、子どもたちがより探究と省察を行い、より良いものを作成するために多くの「しかけ」を講じてきた。実践をふり返り、子ども達へのアンケート調査や成果物などから、その多くが効果的に作用していたと判断している。研究授業の協議会にて参観者の方から指摘があったが、「協働の場面の評価者にはどのような学習効果を想定していたのか」「評価者の評価のポイントはどのようなものであったのか」に対しては、詳細を設定できていなかったと感じている。今後の課題として、講じた「しかけ」が子どもの学びにどのように作用するのかということについて今後さらに詳細に考えていきたいと考えている。

（中岡 正年先生）